

哲 学 科 小 史

1924 (大正13)	哲学科創設.
1950 (昭和25)	従来からあった西洋哲学, 印度哲学, 宗教学の三専攻部門のうち, 印度哲学, 宗教学が仏教学部に吸収される. この年以降, 哲学科は西洋哲学中心となる.
1951 (昭和27)	菅谷正貫助教授就任 (現学長).
1952 (昭和28)	三枝博音教授再就任.
(昭和28)	立正大学哲学会結成. 名誉会長石橋湛山学長 (後首相), 会長三枝博音教授.
1964 (昭和39)	立正大学哲学会紀要第1号発刊.
1967 (昭和42)	大学院文学研究科修士課程哲学専攻設置さる.
1968 (昭和43)	日本哲学会事務局を引き受ける.
1969 (昭和44)	日本哲学会総会を引き受ける.

哲学科は文学部のなかで, 最も古い学科のひとつであるが, その戦前から戦後の現在にいたる歴史を回顧してみると, 三つの大きな時期に分けて考えることが出来る.

一, 創成期. 戦前から終戦直後にかけて, 本哲学科の基礎を構築されたのは, 三枝博音, 樺俊雄の両教授であった. いうまでもなく三枝教授はドイツ観念論からスタートし, 西洋近代技術史のみならず, 日本近世・近代思想史にまで, その広い学識を展開された方である. また, 樺教授は, 京都学派左派に属される人であり, ドイツ社会学, 特にマンハイムらの知識社会学, 文化哲学についての研究は戦前から定評のあるところであり, 戦後もまた激動する政治運動のなかで, 活発な社会的発言を展開してこられたのは, 周知の事実であろう.

この両教授は, 当時の日本の代表的知性であり, 良心とでも言うべき方々であり, この両教授によって醸成された学風が以後の哲学科の精神的遺産となる.

二, 発展期. 三枝, 樺両教授の後をうけて, 本哲学科の発展に尽力されたのは, 菅谷正貫, 江川義忠 (現文学部長) 両教授であった. それまで, 一学年教

名程度の学生数であった哲学科も、両教授を中心とした学内外での活躍によって、30年代後半では20～30名にふくれあがり、40年代前半では100名に近づき、40年代後半では120名に迫る勢いであった。50年代に近づく頃には、むしろ、入学許



哲学科ゼミ風景

可を100名余にいかにしぼるかということが、入試時期における最大の難問題となっている。このような学生数の急増と、卒業生の更なる勉学意欲の熱意に動かされて、昭和42年、大学院に哲学専攻修士課程が設置されることになる。

哲学科がこの時期、これほどの発展を見たのは、菅谷、江川両教授を中心として、全国高校教員各位にむけて、高校新設科目「倫理社会」の研究会を設置したり、その研究成果を『講座・社会と倫理』全五巻、日本評論社にまとめるなどの精力的活動があったおかげである。勿論、日本哲学会総会開催なども、識者に本学哲学科の存在を大きくクローズ・アップさせることになった。

三、充実期。菅谷、江川両教授が学内の要職につかれ、望月一靖教授もまた常務理事の激職につかれた後、本哲学科は若手を中心にして第三の時期に入った。というのは、学生数の多さよりも、更にキメ細い教育と研究の完備を計るべき時期に入った、ということである。現時点での哲学科の陣容は、次の通りである。主任教授として、中世哲学の江川教授、主任代行として、現代西欧哲学の清水多吉助教授、産業心理学の井上隆二助教授、現代東欧哲学の岩淵慶一助教授、現象学、実存主義の手川誠士郎講師である。これに、兼任、非常勤講師を加えれば、20名におよぶ教授陣となる。教授陣の更新とともに、哲学科の内容もまた大きく変貌してきている。江川教授の中世を除いて、教授陣の大部

分が、近代現代の思想に集中しているということである。こんな所にも、本哲学科創成期の精神が脈々と受け継がれてきていると言ってよいだろう。

* * * *

ところで、本哲学科のこのような学風は、激動の時代を生きる若い学生、大学院生にも大きな影響を与えている。哲学青年というイメージがもたらす、青白い顔つきに、閉鎖的人間という雰囲気は、本哲学科生に関する限りあまり見受けられない。社会的関心も豊かであり、積極的に自己を主張し、行動性に富む、というのが本哲学科学生の特質であろうか。したがって、このような特質をもつ本哲学科の卒業生は、NHKを始めとするジャーナリズムで活躍している者も多い。勿論、高校「倫理社会」の教員への進出も多い。

それらの卒業生、大学院生、研究室との結びつき、交流の強さも、他学科に見られない特色であろう。年一回の立正大学哲学・心理学会総会のほか、例えば、昭和50年度の夏休みは、それらの卒業生と研究室とで、あのヴァイマル時代の名映画、『カリガリ博士』『メトロポリス』などを観賞した。次はドイツ映画のみならず、米仏英の代表的映画を研究室で上映し、『映像と現代思想』といったテーマで、討論しようと呼合っている。

(文学部助教授・清水多吉)